

令和 7 年度第 3 回播磨科学公園都市の新たなあり方検討協議会
議事概要

1 日 時 令和 7 年 12 月 24 日（水曜日）15:00～17:00

2 場 所 ひょうご環境体験館「シアター」

3 報 告

第 2 回協議会以降の動きについて

資料に基づき説明

4 議 事

（1）今後の進め方

資料の基づき説明

（2）意見交換

【委員意見】

（たつの市長）

- ・ 県に不信感があり、次の 3 点について説明していただきたい。
- ・ 1 点目は「兵庫県立粒子線医療センター」についてである。病院局から、独自の判断により令和 9 年度末に廃止する方針である旨が示されたと認識している。また、そこに残る建物の次の使い道を検討するために、今後サウンディング調査を実施する予定と聞いている。たつの市としては、県に対し施設を存続していただくよう要望を行っているところである。また、播磨高原広域事務組合においても、小学校を残す方向で懸命に取り組まれている。さらに、本協議会においても、テクノに関して前向きに検討を進めている最中である。このような状況にもかかわらず、県から施設を廃止していく方針が示されていることについては、納得できるものではない。
- ・ 2 点目に、「光都強度行動障害対応モデル地区」については、県からたつの市に対し、要望書を提出した上でモデル地区の管理を行ってほしいとの要請があったため、これに沿って取組を進めてきた。しかしながら、その後、一転し、事業を中止するとの伝えがあり、要望書を取り下げるよう求められた。この一連の対応について、県の姿勢に対して不信感を抱かざるを得ない。
- ・ 3 点目に、播磨高原広域事務組合が管理している「ダイセル播磨光都サッカー場」の大規模修繕に関する件である。これまで大規模修繕費用については全額を企業庁が負担してきたが、資金不足を理由に対応がなされていない状況である。このため、播磨高原広域事務組合としても約 1 億円を負担する意向を示し、大規模修繕を求める要望書を提出したが、現在に至るまで回答は得られていない。
- ・ 本市としては、こちらの要望等に対して県から明確な回答をいただき、兵庫県としての方針を踏まえた上で、適切に対応していくことが望ましいと考えている。しかしながら、要望に対して何ら回答がない状況は、適切とは言えない。

(上郡町長)

- ・本協議会においては、これまで企業庁の資金的な問題が背景にあることについて、繰り返し説明を受けてきた。今後、作業部会として3つのチームに分かれて議論が開始される予定であるが、こうした資金的な問題の存在を無視し、白紙の状態から議論を進めることになるのか疑問である。資金的な課題があるのであれば、県からも具体的な解決策を提示した上で、議論を進めていくべきではないかと考えている。

(佐用町長)

- ・たつの市長が述べられた内容、特に強度行動障害対応モデル地区に関しては、本町としても同様に振り回されているとの認識を持っている。
- ・マネジメント会議や地域意見交換会において、度重なる意見聴取が行われたとのことであるが、そこには多くの示唆が含まれていると考えられる。作業部会においては、そうした意見を丁寧に拾い上げる運営を求めたい。
- ・佐用町は、たつの市や上郡町と異なり、播磨科学公園都市内に住民はいないものの、SPring-8の主な所在地である。また、地勢的に産業用地の確保が困難な中、播磨科学公園都市は佐用町の住民にとって重要な就労の場となっており、その恩恵を受けている。このような状況の中で、産業用地はほぼ売却済みとなっている。第2工区及び第3工区が当初の想定どおりに進んでいないことは承知しているが、枇杷ノ谷については残土処分地として広大な土地があると聞いている。今後の取組としてサウンディング調査を実施するとの説明があったが、枇杷ノ谷を含めた調査を行うのか確認したい。
- ・伊藤専門職からSPring-8の取組について説明があったが、所在市町として今後も連携を深めていきたいと考えている。私は文系出身なので、どのような取組ができるのか、ぜひ参考となる助言をいただきたい。

(委員：[欠席のため事務局により代読])

- ・前回の協議会以降、3市町、播磨高原広域事務組合、西播磨県民局、企業庁をはじめとする関係者が一体となり、播磨科学公園都市の再生に取り組んできた。播磨科学公園都市は再生に向けた第一歩を踏み出したと言える。こうした時間をかけて進めるプロセスそのものにこそ、大きな意義があると考えている。
- ・地域を良くしていくためには、地域住民が自らの課題に向き合い、自ら解決していく自治の強化が必要不可欠である。そのためには、3市町、播磨高原広域事務組合、西播磨県民局、企業庁などが協働し、テクノの将来像を描くとともに、その実現に向けて何ができるのかを考え、行動に移していける土台を構築することが今後の課題である。これまでの議論の中で示されたアイデアを基に、将来像を描きながら、地域の課題を住民や企業等と共有し、解決の術を一緒に考えていくことが重要である。
- ・SPring-8と共に発展する科学公園都市の持続可能な未来を実現するためには、地域の参画と協働を促し、住民主導による持続可能な仕組みを構築することが重要である。私

自身も可能な限り協力したい。あわせて、関係者それぞれの主体的なコミットメントを期待する。

(委員)

- ・播磨科学公園都市が現在のような状況に至った要因について3点ほど申し述べたい。
- ・1点目は、播磨科学公園都市は開発行政の一環として整備された都市であることである。開発とは、空間に機能を付与し、その空間に意味を持たせる行為である。一方で、行政組織は分野ごとに機能別に分かれており、各部署がそれぞれの機能に着目して施策を検討する構造となっている。しかしながら、人口減少が進む中においても空間そのものは減少しないため、結果として機能のみが縮小されてきたのが現状である。今後は、既存の機能をどのように活用していくのか、また次にどのような機能を担わせていくべきかについて、改めて議論する必要がある。
- ・2点目は、なぜ「街」が必要なのかという観点である。工業都市など産業立地を考える際には、これまで生産部門を起点として議論されることが多かったが、ここでは消費側から発想していくことが重要である。伊藤専門職の説明にあった、道路の白線を消えにくくする研究は、その分かりやすい例である。すなわち、消費の現場から新たなモノづくりやイノベーション、技術開発につなげていくという視点が求められている。かつてのように、海外にモデルや市場を求め、生産効率の向上のみを追求すればよかった時代とは異なり、これからは日本において自分たちに何が必要なのかという視点から生産を考えることが重要である。そのためには、人の暮らしや消費が集積する「街」の存在が不可欠であり、街と切り離して消費を考えることはできない。例えば、トヨタ自動車による実験都市である Toyota Woven City も、同様の発想に基づく取組である。
- ・3点目は、イノベーションにはグローバルな視点が不可欠であり、あわせて国の政策とも関わっていく必要がある点である。現在の国政においては、産業クラスターへの関心が示されている状況である。こうした国の政策動向を的確に捉えつつ、兵庫県として国に対してどのように働きかけていくのかという視点を持つことも重要であると考えている。

(委員)

- ・今後は、皆と共に未来志向で知恵を出し合い、検討を進めていきたいと考えている。たつの市長が強い憤りを示されている点については、そうした前向きな議論を行う前提として、まず信頼関係が不可欠であるという趣旨であると受け止めている。この点については、県においても誠意ある対応を行っていただきたい。また、3市町から様々な要望や考えが示されている背景には、「この街をより良くしたい」という共通の想いがあると信じている。私自身も同様の想いを持っている。一方で、そこにはそれぞれの経緯や立場の違いがあり、結果としてこの20年、30年の間に、少しずつ歯車がずれてきたのではないかと感じている。

- ・資料に示された「テクノの未来を方向付けるコンセプト（キーワード）（案）」及び「作業部会の基本的な進め方（案）」については、皆さんの共通の想いに加え、普遍的な価値が示されている内容であると受け止めている。この点については、基本的に現案のまま進めていきたいと考えている。自らの市町、あるいはこの地域がより良くなってほしいという共通の想いに期待し、その力を信じたい。まずは今回、この街を何とか良くしたいという想いを皆さんと共有できれば、それで十分である。
- ・作業部会には兵庫県の担当課職員も参画すると聞いている。作業部会に加わり、共に取り組んでいただけることは大変心強い。県と市町に上下関係はなく、関係者が一体となって知恵を出し合う以外に道はないと認識している。これまで県が主導してきた経緯については承知しているものの、結果として十分な成果に至らなかった以上、共通の想いを基盤として、やり方や考え方を改め、正確な情報や根拠に基づいた議論を進めていく必要がある。

（委員）

- ・恐らく全国的にも同じような課題を抱えている郊外住宅地は沢山存在している。この街を残すことができる、またはビジョンを示すことができると、他の地域にも強いメッセージを送ることができるのではないか。
- ・SPring-8 や兵庫県立大学は、この街の強みとして極めて大きな存在である。これらの資源を十分に活用しながら、日本国内にとどまらず、SPring-8 に関連する音楽フェスなどの取組も含め、日本だけのモデルに収まらない枠組みで検討していくことが望ましいのではないか。
- ・播磨科学公園都市のみで完結することが困難である中で、外部とどのようにつながっていくのが極めて重要である。最寄駅との接続を含む公共交通の在り方をはじめ、生活、教育、医療など多様な分野において、播磨科学公園都市に不可欠な機能は何か、あるいは外部と連携することで補完できるものは何かについて、総合的に検討していく必要がある。
- ・この街を明るい未来へと導いていければと考えている。地域住民の参加についても、負担が大きそうだ、難しそうだと受け止められる取組では、参画を得ることは難しい。まずは、我々自身が前向きな気持ちで、わくわくするような会議や議論の場を創っていくことが重要である。
- ・フロンティア祭において住民から寄せられた意見について、テキストマイニングの手法を用いて簡易的な分析を行った。この手法を用いることで、住民がどのような強さで何を求めているのかを大まかに把握することができる。このような手法を活用しながら、ニーズを整理し、優先順位を付けて取りまとめていく支援ができる。なお、優先順位の設定に当たっては、客観性を確保しつつ進めていく必要があると認識する。

（委員）

- ・今後の進め方について示された説明内容は、合意形成の観点から非常に示唆に富むものである。合意形成とは、あらかじめ用意された選択肢の中からいずれかを選び、その結果について納得していない人を説得したり、交渉したりすることではない。合意形成とは、「選択肢そのものを関係者全員で作りに上げていくプロセス」である。誰かが作成した案を提示し、説明を尽くせば合意が得られるという考え方は適切ではない。むしろ、各自が多様なアイデアや制約条件を持ち寄り、対話を重ねる中で、自分たちが提示する選択肢を共に形成していくことこそが合意形成である。播磨科学公園都市における今回の取組は、こうした本来の意味での合意形成を丁寧に進めていこうとするものであり、そのプロセスに関われることを、私自身大変光栄に思う。
- ・この街が今後どのような姿になっていくのかについては、予算面や空間的条件、社会的条件などの制約により、必ずしも理想とする姿をそのまま実現できない場合も想定される。やむを得ない側面もあるが、合意形成の重要な意義として、たとえ望んだ形に至らなかったとしても、対話のプロセスに参加することで、参加者自身が変化していく点が挙げられる。多くの人がこの街の将来について議論し、主体的に関わっていく中で、その一人ひとりの街を見る視点が変わっていくこと自体も、極めて重要な変化として捉える必要がある。
- ・議論を重ねていく中で、関係者全員が価値観を転換していくような作業を行うことが重要である。合意形成の現場においては、そのような価値の変化がしばしば生じるものであり、こうした「化学反応」を生み出す協働のプロセスをいかに構築していくかが重要な論点であると考えている。この点については、本プロジェクトに関わる皆と共に考え、努力していきたい。これまでのマネジメント会議においては、「アナログとデジタル」や「科学と自然」、「科学とアート」など、他の都市ではあまり見られない、対照的でありながら組み合わせることで新たな可能性を感じさせるキーワードが数多く示されてきた。今後、街の在り方を検討していく過程においても、こうした価値の転換は必然的に生まれてくるものと考えている。
- ・資料に示された「作業部会の基本的な進め方（案）」は、基本的なスタンスとして非常に適切な内容である。今後は、このスタンスを踏まえつつ、具体的な実践をどのように描いていくのかについて、関係者と共に検討していくことになると考えている。
- ・播磨科学公園都市の新たなあり方検討協議会の構成員に加え、作業部会やマネジメント会議のメンバーも含め、全体を一つのプロジェクトチームとして捉えている。プロジェクトチームとは、同じ目標に向かって共に取組む仲間であり、その都度、同じ方向を向いていることを確認しながら、目標に向かって協働していく存在である。その意味においては、それぞれの組織の上下関係を意識することなく、水平的かつリゾーム的な関係性の中で動いていくことが重要であると考えている。

(委員)

- ・佐用町長から「私は文系の人だから」という趣旨の発言があったが、私がこれまで報告してきた取組の多くは、むしろ文系分野の視点から始まっているものである。その際に、「SPRING-8を活用してほしい」といった提案を出発点としたのではなく、地域の皆さんが抱えている疑問や課題について、「一緒に何とかしていこう」という姿勢から取組が始まっている。そのように地域発で始まった取組が、結果として国家戦略につながるような展開を見せている例もある。こうした意見交換や対話の積み重ねこそが、まちづくりにもつながるものだと考えている。
- ・私としては、実践を重ねながら取組を進めていきたいと考えている。数年単位の計画策定にとどまるのではなく、実践を並行して進めつつ、その成果や課題を計画に反映させていくことが重要であると認識している。来年度以降についても、3市町が連携し、実践を踏まえながら共に取り組んでいきたいと考えている。また、計画に位置付けられた取組については、途中段階においても可能な範囲で協力していきたい。

(委員)

- ・2027年には30周年を迎え、仮に開業時と呼応するフェスティバルなどの記念行事をするのであれば、準備に向けて時間的に十分な余裕があるとは言えない。来年度中に完全なコンセンサス形成に至らなかったとしても、兵庫県、3市町、そして住民に対し、「このような未来が考えられる」という姿を魅力的、かつ分かりやすく提示していく必要がある。播磨科学公園都市は国家プロジェクトという位置付けではないものの、近畿地方の国の出先機関等とも連携しながら、国に対しても積極的に発信し、理解と関心を得つつ進めていくことが重要である。
- ・播磨科学公園都市の名称は、現在、関西でも全国でもあまり知られていない。そのため、今こそ改めて、都市のブランディングを見直し、対外的に積極的に発信していく時期ではないかと考える。例えば、特定の分野における「聖地」として位置づけ、この分野においてはこの街が非常に優れているという明確なメッセージを再度発信することが重要である。特に、「時間とともに成長する森の中の都市」という当初のコンセプトは、持続可能性や環境との共生が重視される今日において、世界的にも共感を得られる考え方であり、大きな魅力となり得る。
- ・デンマークでは、オーフスという都市が技術に特化した学術研究都市として世界的に注目されている。オーフスは人口の約13%が大学生であり、街全体の平均年齢が20代という非常に若い都市である点が特徴である。さらに、大学を卒業した人材がそのまま街の中で就職し、定着するという点を強みとして明確に打ち出している。播磨科学公園都市においても、昼間人口のうち約1,900人が学生であるという状況は、他の都市と比べて極めて稀であり、若者の割合が高いという点は大きなポテンシャルを有していると言える。テクノポリスも本来であれば、「魅力的な若者の街」として積極的にアピールすべきである。しかしながら、現状では若者が集い、活動する雰囲気十分に醸成され

ているとは言い難い。そのため、意図的かつ継続的に、若い人々が集まりたくなる環境や空気感を作り上げていく必要がある。

- ・北ヨーロッパには、そのほかにも森の中に立地しているからこそ拠点を構えたいと考えている企業を誘致している都市がある。たとえばフィンランドのタンペレは、最新の技術開発を行う企業が集積する都市であると同時に、自然との共生や市民参加型の取組を重視したクリエイティブシティとして打ち出している。このような先進的な事例を参照しながら、今後の進め方を検討していくことが望ましい。なお、オーフスやタンペレの事例については、機会があれば詳細な報告を行うことも可能である。

(委員)

- ・各々にこれまでの経緯や立場があるものと考えられる。そのような背景を踏まえつつ、率直な意見を互いに述べ合う場が設けられていること、また現場レベルでの詳細な検討が行われていることは、着実な前進である。
- ・播磨科学公園都市には住民が暮らしており、その暮らしを守ることを第一の前提とすることが極めて重要である。その上で、現状の課題を解決するとともに、将来像や未来を語っていくことが求められる。人口減少という大きな流れの中で、さまざまな課題が存在するが、重要なのは、多様な分野の視点から現場の実情を踏まえた前向きな施策を打ち出していけるかどうかである。その点が、今後の取組の成否を左右するポイントになると想定される。
- ・本取組においては、結果だけでなくプロセスそのものが極めて重要である。プロセスについては、すでに新しい手法を取り入れながら進めていただいている。前向きな視点を共有し、フラットな関係のもとで共に街をつくっていくという考え方が大前提となる。そのため、作業部会の運営や検討プロセスに関することなど、些細なことでも提案や意見を事務局まで積極的に寄せていただきたい。

【事務局】

- ・佐用町長からのサウンディング調査の対象について枇杷ノ谷は含まれるのかというご質問について、枇杷ノ谷を含めて未利用地という形で、検討の一材料として調査の対象に含めたいと考えている。
- ・上郡町長からの、企業庁の資金収支不足に端を発している点や、それに対して県が解決策を示すべきではないかという意見については、関係者間で共有しながら議論を進めていきたいと考えている。また、いただいた意見を踏まえつつ、検討をさらに深め、将来を見据えた前向きな解決策と一緒に導き出せるよう取り組んでいきたい。
- ・たつの市長から示された３点の意見について、誠意ある回答を求める要望があった。また、共に議論し、未来志向で検討を深めていきたいという趣旨のもと、委員からも真摯に対応すべきとの意見が出された。これらの意見はいずれもそのとおりであると認識している。回答可能な範囲において、丁寧かつ適切に回答していきたいと考えている。

【兵庫県副知事】

- ・ たつの市長から、3点にわたる厳しい指摘をいただいた。強度行動障害対応モデル地区については、これまでの経緯等について、市長の発言のとおりであると認識している。粒子線医療センターについては、県においても外部のあり方検討委員会で検討を行ってきた。その結果、施設の老朽化が進んでいること、現行の保守管理契約が令和9年度末までとなっており、今後も治療を継続するためには治療設備の更新が必要であること、さらに累積赤字が大きくなっていることなどを踏まえ、2027年度末までに撤退することが望ましいとの意見が示されている。これまで丁寧に説明してきたつもりではあったが、本日、たつの市長からこのような発言があったことを踏まえると、説明が十分に行き届いていなかった可能性があるとして受け止めている。この場で詳細な議論を行うことは難しいため、改めて丁寧に説明させていただきたい。

【兵庫県公営企業管理者】

- ・ 企業庁は十分な資金を有していないが、将来の県民負担を避けることに配慮しながら、都市の持続可能性を確保するという課題に取り組む覚悟がある。
- ・ 本日は、まだ検討の途中段階であり、今後に向けた出発点に立った状況である。本日いただいた市町長からの意見や留意点については、今後の検討や取組に的確に反映していく必要があるという認識を、参加者全員で共有できたものと考えている。本日の協議会も含め、今後はより一層、未来志向で取組を進めていきたい。引き続き、関係者各位の協力をお願いしたい。

以上